



ステップスギャラリーのオーナーでもありアーティストでもある吉岡まさみは、既に2014年4月の同ギャラリーグループ展「Triple Chat(宇野和幸、金在寛、吉岡まさみ)」でカラード・バーを12点発表したが、今回は4×4cmは同様・幅40cmが12点、50cmが21点、30cmが5点の、カラード・バー新作、計38点による個展を開催した。

「Triple Chat」で私は「絵画でもあり立体でもあり、インスタレーションである」と評した。この言及では足りないので今回のパンフレットでは作品を着地させた場所を忘却するとカラード・バーは事象となり、平面と立体、二つの色彩という二項対立から逃れて美術ではなくなり、テーブルインスタレーション同様、不気味なものとなると論じた。

その上で会場に訪れると、再び衝撃が走った。吉岡は縦、横、斜めと縦横無尽にカラード・バーを展示する。するとカラード・バーの水平線が強調される。水平線は視線を横へ逃がしていくと、遙か彼方へ消滅していくのだ。そこには光も闇も遣されていない。存在が消失する状況を、誤認がないか何度も確かめると、今度は二つの色を分断する線が、活断層に見えてくる。ならば垂直のカラード・バーには横揺れが生じ、斜めに展示された作品は重力を失う。

「ただそこに存在することの確かさと儚さ」をカラード・バーは映し出すことができるのではないかと吉岡はステートメントとして画廊入り口に貼った。この言葉は我々、個々の人間の確かさを尊重している。我々は生きている。

